



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第108回演奏会

指揮 山田 一雄 (新交響楽団名誉指揮者)

アルト独唱 辻 宥子
テノール独唱 伊達 英二

シューベルト：交響曲第8番 口短調 D.759 「未完成」

Franz Schubert : Symphonie Nr. 8 h-moll <Unvollendete>

I. Allegro moderato

II. Andante con moto

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

マーラー：「大地の歌」

ハンス・ペトゲの訳詩集「中国の笛」の中の漢詩による
テノールとアルト (又はバリトン) 独唱と管弦楽のための交響曲
Gustav Mahler : <Das Lied von der Erde>,
eine Symphonie für Tenor- und Alt- (oder Bariton)- Stimme und Orchester
nach chinesischen Gedichten in der Übertragung Hans Bethges
<Die chinesische Flöte>.

- | | |
|--------------------------------------|--------------------|
| I. Das Trinklied vom Jammer der Erde | 現世の悲しみをうたう酒の歌 |
| (Allegro pesante) | アレグロ 重々しく) |
| II. Der Einsame im Herbst | 秋に淋しきもの |
| (Etwas schleichend. Ermüdet) | ひそやかに 疲れたように) |
| III. Von der Jugend | 青春について |
| (Behaglich heiter) | 楽しげに 明るく) |
| IV. Von der Schönheit | 美しさについて |
| (Comodo Dolcissimo) | 適度な速さで とても甘くやわらかく) |
| V. Der Trunkene im Frühling | 春に酔えるもの |
| (Allegro Keck, aber nicht schnell) | アレグロ 大胆に、しかし速すぎずに) |
| VI. Der Abschied | 告 別 |
| (Schwer) | 重苦しく) |

1985年7月20日 (土) 午後7時 / 新宿文化センター大ホール

協賛：日本マーラー協会

大地の歌

山田一雄筆

出 演 者 紹 介

山田 一雄

1912年東京生れ。

1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学び、1941年新交響楽団(現N響)補助指揮者、翌42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの8番、「春の祭典」、「荘厳ミサ」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手がけ、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小授章を受けた。84年より当団名誉指揮者。

辻 宥子(つじ・ゆうこ) メゾ・ソプラノ

シドニー州立音楽学校を経て国立音楽大学卒業、同専攻科修了。エリザベス・トッド、佐々木成子、武岡鶴代、西内静に師事。

1969年、第4回民音コンクール第3位入賞。同年秋ウィーンに留学。1970年ミュンヘン音楽コンクール第3位。1971年バルセロナのマリア・カナルス・コンクール第2位、オランダのヘルトゲンボッシュ・コンクール第1位に入賞。

その間、各地でバッハの「ロ短調ミサ」、ロッシーニの「スタバト・マーテル」などを歌い、74年春帰国。

コンサートではマーラーの「交響曲第2番」、バッハの「マタイ受難曲」などをN響・東フィルなどと協演。

オペラでは1974年に「マクベス」のマクベス夫人をはじめ、1984年新日フィルの「ラインの黄金」(コンサート形式)のフリッカまで数多くの役柄で活躍している。二期会会員。

伊達 英二(だて・えいじ) テノール

国立音楽大学卒業。中村義春、久岡昇、田口興輔に師事。

二期会オペラスタジオ研究生の時、昭和55年度文化庁国内研修員に選ばれる。

すでに多くのコンサートに出演し経験を重ねており、1981年秋に小澤征爾指揮の新日フィル定期演奏会「サロメ」(R. シュトラウス)にはユダヤ人を歌い、又、オペラでも同年7月の「マイスタージンガー」(ワーグナー)で徒弟の一人に選ばれる。1983年藤原歌劇団「マハゴニー市の興亡」(クルト・ワイル)のジムを好演。1984年10月「椿姫」(ヴェルディ)のガストンを歌い、今後の活躍が期待される。

二期会準会員。

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月に創立されて以来、30年近くにわたり自主的に運営されているアマチュアオーケストラで、百余名の団員の職業は会社員・自営業・主婦・学生など多岐にわたっている。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の指導のもとに、ソビエト及び国内の演奏旅行、ベートーベン・チクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行なった。

1976年の創立20周年記念演奏会「日本の交響作品展」により、「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュアオーケストラとしては初めて第8回サントリー音楽賞を受賞、以来この邦人作品シリーズは毎年1回ずつ継続されている。また1979年の第86回演奏会以来、名誉指揮者山田一雄の指導により、グスタフ・マーラーの交響曲に取り組み、マーラーシリーズはこれまでに6回を数えている。新響は邦人・マーラーを含め年4回の自主演奏会の他に、公共団体・学校等の依頼演奏会も行ない、アマチュアオーケストラの可能性を最大限に追求している。

山田一雄氏と
マーラーと
新響と

山田一雄先生はご存知の通り、マーラーの交響曲を数多く手掛けております。2番・8番・花の章は本邦初演、「大地の歌」はJ. ローゼンシュトックの1941年の初演に続き、1947年に日本人では初めて本日と同じ「未完成」と共に演奏されています。また、1978-79年に行なわれた藤沢市主催の、「山田一雄の世界」という四夜にわたる演奏会では、最終日をマーラーの8番の白熱した演奏で閉じられました。

新響が挑戦シリーズの一環としてマーラーを取り上げたのがその1979年、そしてそれは山田先生との出会いでもありました。

先生が練習場に入られると、音楽的緊張感が部屋中にぴんと張りつめます。その指揮棒からは、「音楽とは何か」が無言のうちに語られ、演奏者はマーラーの音響の中に、いつの間にか心地よくひたっていきます。

初めて演奏した5番のシンフォニーは、山田先生の情熱溢れる指揮棒と共に、新響メンバーの心に深く刻み込まれました。その感激が、翌年からのマーラーシリーズを今日まで継続させた原動力です。あと残りは1・4・8・10番ですが、再演を望む団員の声も多く、山田先生を介した新響のマーラー熱は、まだ当分続きそうです。

新交響楽団マーラーシリーズ
(指揮はいずれも山田一雄氏)

第1回 花の章

交響曲第5番 1979.12.1 東京文化会館

第2回 交響曲第6番 1980.11.20 日比谷公会堂

第3回 交響曲第7番 1981.9.19 新宿文化センター

第4回 交響曲第9番 1983.1.23 簡易保険ホール

第5回 交響曲第2番 1983.11.1 東京文化会館

S 大島洋子 A 木村宏子

合唱 新星日響合唱団

第6回 交響曲第3番 1984.9.26 昭和女子大学

人見記念講堂

A 伊原直子

合唱 晋友会・藤沢ジュニアコーラス

未完成——シューベルトとマーラー

この二人の作曲家の名前を耳にする時、私達は「音楽の都」ウィーンに思いを寄せるだろう。しかしシューベルトが生涯ウィーンの地に育まれながら作曲をしたのに対し、マーラーは宮廷歌劇場の指揮者をつとめながらも、決してその地に相和することなく、その生涯を終えている。そして「ウィーン」に対するこのような関わり方の違いが、二人の音楽の上にも如実に表われている。

シューベルトは、その短い生涯(1797-1828)の間に、交響曲・室内楽曲・歌曲その他様々なジャンルに、数えきれない程の作品を残している。グレートとよばれるハ長調交響曲や室内楽のいくつかは、かなり長大であるが、作品の多くは珠玉の小品と呼ぶのが相応しい。そしてそれらの中には、当時のヨーロッパの小市民的生活と幸福感が至る所顔を出している。歌曲の王と言われる彼の傑作の一つ、「美しき水車屋の娘」で歌われているのも、娘に失恋する若者の素朴な感情である。

一方マーラー(1860-1911)の作品は少なく、11の交響曲のほかは、いくつかの管弦楽付き歌曲と室内楽があるだけである。しかし、それらはいずれも長く、重い。そして「水車屋の娘」と同じ設定の歌曲「さすらい若人の歌」では、若者の悲しみはより深く、しかも暗い。それはあたかも、どこにも安住の地を見出せないマーラー自身の心情のようでもある。

シューベルトの未完成がなぜ未完なのかは、諸説あるが、それが死によるものでないことは確かである。マーラーは先人の例を嫌って9番目の交響曲に番号をつけず、「大地の歌」としたが、彼の第10交響曲は死によって中断してしまった。

——交響曲第8番 口短調 「未完成」——

*作曲年代：1822年10月30日着手、中断した時期は不明

*初演：1865年12月17日 ウィーン ヨハン・ヘルベック 指揮

*出版：1867年 スピーナ

*楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、
ファゴット2、ホルン2、トランペット2、
トロンボーン3、ティンパニ、弦5部

*使用楽譜：Breitkopf & Härtel

*演奏時間：22分

大地の歌——自然と人生

マーラーは同時代の詩人ハンス・ベトゲの編訳した漢詩集「中国の笛」をもとに、自分で自由な手を加えて交響曲「大地の歌」を作曲した。それは彼がウィーンに別れを告げ、指揮活動の場をアメリカへ移した時期であった。

曲はテノールとアルトの独唱が交互に歌う六つの楽章から成っており、それぞれ題がつけられている。原詩の作者は盛唐の詩人李太白・孟浩然・王維らとされているが、マーラーはそれらを大胆に変形させていて、元の詩を全て特定するのはむずかしい。

作曲者にとって「大地 (Erde)」とは、酒を飲んで忘れたいこの世のはかない「人生」(第1、5曲)であると同時に、安らぎを求めてその豊かな懐へ帰って行く母なる「大自然」(第6曲)でもあった。

マーラーは当時の自分の状況—安住の地を持たない、長女の死、心臓病の発見—から、人生の無常感を歌うこの詩集の中に何かのヒントを得、より普遍的なものに作り変えて作曲したのであろう。そしてそれが結果として、この曲に接する東洋人である私達に、ある種の親近感を抱かせるのかもしれない。

——交響曲「大地の歌」——

- *作曲年代：1907年夏—1908年夏 南オーストリア
トブラッハ (現イタリア領ドブリアッコ)
- *初演：1911年11月20日 ミュンヘン B.ワルター指揮
- *出版：1912年 Universal
- *楽器編成：ピッコロ、フルート3 (第3はピッコロ持替)、オーボエ3 (第3はコール・アングレ持替)、変ホ調クラリネット、クラリネット3、バス・クラリネット、ファゴット3 (第3はコントラファゴット持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、バス・チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タンブリン、トライアングル、タム・タム、グロッケンシュピール、チェレスタ、ハープ2、マンドリン、弦5部
テノール及びアルト (又はバリトン) 独唱
- *使用楽譜：Universal
- *演奏時間：約57分

忙しい方のための一口解説

初めての練習の時、トレーナー氏いわく、「この曲は初めから終いまで酔っぱらいの歌である。1曲目はまだ威勢がいいが、だんだん酔いがまわってきて、最後の曲ではもう收拾がつかなくなるくらい酩酊してしまっている。皆さんどうぞ、冷静に演奏して下さい。」

さあ飲もう／僕は過労だ／若い頃は楽しかった／恋もした／でも、みんな春の夢だった／友よ帰ろう、大地はいないなあ

もう少しお時間のある方のために

第1楽章 現世の悲しみをうたう酒の歌 (テノール)
悠久の大自然に対し、人生のはかなさをうたい嘆きながら飲む酒の歌

第2楽章 秋に淋しきもの (アルト)
人生の疲れを癒そうとする者に、秋の風は冷たく吹き過ぎてゆく

第3楽章 青春について (テノール)
池の中に建つあずまやで歓談する人々と、それらが映る池ののどかな風景

第4楽章 美しさについて (アルト)
花を摘む乙女達と馬で駆ける若者達、若者に秘かな思いを寄せる娘心

第5楽章 春に酔えるもの (テノール)
もし人生が夢なら苦勞などせずに、酒を飲み歌を歌い、春が来ようが寝て過ごす

第6楽章 告別 (アルト)
自然界が全て眠りにつく夕べの美しい一時、松の木陰で一人友を待つ／やってきた友と別れの盃を交わし、安らぎを求め、大自然の悠久を歌う

更にお時間のある方

は、次ページの訳詞をお読み下さい。これは演奏する際に大意を掴むために訳したもので、漢詩およびベトゲの訳詩にはあまりこだわらず、マーラーのドイツ語にそっています。
(流思惟)

Das Lied von der Erde

「大地の歌」 歌詞対訳

1. DAS TRINKLIED VOM JAMMER DER ERDE 現世の悲しみをうたう酒の歌

Schon winkt der Wein im gold'nen Pokale,
既に酒は黄金の杯に満ちているが

Doch trinkt noch nicht, erst sing' ich euch ein Lied!
まだ口をつけずに、まずあなた方に一曲の歌を歌おう！

Das Lied vom Kummer soll auflachend in die Seele euch klingen.
この悲しみの歌をあなた方の心に高らかに笑いながら響かせよう。

Wenn der Kummer naht, liegen wüst die Gärten der Seele,
悲しみが近づくとき、心の花園は荒れはて、

Welkt hin und stirbt die Freude, der Gesang.
枯れしほみ死んでしまうだろう、喜びも、そして歌も。

Dunkel ist das Leben, ist der Tod.
生は暗く、死もまた。

Herr dieses Hauses! Dein Keller birgt die Fülle des goldenen Weins!
この家のあるじよ！君の酒蔵は黄金の酒に満たされている。

Hier, diese Laute nenn' ich mein!
さあ、ここにあるのが私の琴だ。

Die Laute schlagen und die Gläser leeren,
琴をかき鳴らし、杯を飲みほすこと、

Das sind die Dinge, die zusammen passen.
それらは互に相和するものだ。

Ein voller Becher Weins zur rechten Zeit ist mehr wert,
杯に満ちた酒をふさわしい時に飲むのは一層価値がある。

Ist mehr wert, ist mehr wert als alle Reiche dieser Erde!
この世のあらゆる富にも増して、

Dunkel ist das Leben, ist der Tod!
生は暗く、死もまた！

Das Firmament blaut ewig, und die Erde
天空は永遠に青く、そして大地は

Wird lange fest steh'n und aufblüh'n im Lenz.
ゆるぎなく横たわり、春には花で満ちる。

Du aber, Mensch, wie lang lebst denn du?
しかし人間よ、君はどれだけ長く生きるというのか？

Nicht hundert Jahre darfst du dich ergözen,
百年足らずしか君は楽しめないのだ、

An all dem morschen Tande dieser Erde!
この世のはかないたわむれを、

Seht dort hinab! Im Mondschein auf den Gräbern
あの下の方を見よ、月光の中で墓の上に

Hockt eine wild-gespenstische Gestalt.
野性のあやしげな姿がうずくまっている。

Ein Aff' ist's! Hört ihr, wie sein Heulen
猿だ！聞くがいい、猿の叫びが

Hinausgelte in den süßen Duft des Lebens!
この世の甘い香りの中にひびきわたるのを！

Jetzt nehmt den Wein! Jetzt ist es Zeit, Genossen!
さあ今こそ酒をもう、今こそその時だ、味わうがいい！

Leert eure gold'nen Becher zu Grund!
君の黄金の杯を飲みほすがいい！

Dunkel ist das Leben, ist der Tod!
生は暗く、死もまた！

2. DER EINSAME IM HERBST 秋に淋しきものの

Herbstnebel wallen bläulich überm See,
秋の霧が湖の上に青くたちこめ、

Vom Reif bezogen stehen alle Gräser;
霜が草地を全とおおっている。

Man meint, ein Künstler habe Staub von Jade
まるで、芸術家がひすいの粉を

Über die feinen Blüten ausgestreut.
美しい花の上にまいたようだ。

Der süße Duft der Blumen ist verflogen;
花の甘い香りはすでに消え、

Ein kalter Wind beugt ihre Stengel nieder,
冷たい風が花の茎を下へ折り曲げている

Bald werden die verwelkten, gold'nen Blätter
まもなくしおれた黄金のはすの葉は

Der Lotosblüten auf dem Wasser zieh'n.
水の上を流れていくだろう。

Mein Herz ist müde. Meine kleine Lampe
私の心は疲れている。私の小さなランプは

Erlosch mit Knistern, es gemahnt mich an den Schlaf.
ぱちぱちと音を立てて消え、私を眠りへと誘う。

Ich komm' zu dir, traute Ruhestätte!
私はおまえの所へ、静かにくつろげる所へ行こう。

Ja, gib mir Ruh, ich hab' Erquickung not!
さあ、私に安らぎをおくれ、私は元気をとりもどしたい。

Ich weine viel in meinen Einsamkeiten.
私は淋しさの中で一人泣きぬれる。

Der Herbst in meinem Herzen wärt zu lange.
秋は私の心の中でとても長く続いている。

Sonne der Liebe, willst du nie mehr scheinen,
愛の太陽よ、おまえはもう決して輝かないのか。

Um meine bittern Tränen mild aufzutrocknen?
私の苦い涙をやさしくかわかしてくれるためには。

3. VON DER JUGEND 青春について

Mitten in dem kleinen Teiche
小さな池のまん中に、

Steht ein Pavillon aus grünem
立っているあずまやは緑と

Und aus weißem Porzellan.
白の陶土でできている。

Wie der Rücken eines Tigers
虎の背中のように

Wölbt die Brücke sich aus Jade
弓なりに曲ったひすいの橋が

Zu dem Pavillon hinüber.
あずまやに向ってかかっている。

In dem Häuschen sitzen Freunde,
その小さな家の中には仲間たちが座り、

Schön gekleidet, trinken, plaudern,
美しく着飾り、酒を飲んで談笑し、

Manche schreiben Verse nieder.
何人もが詩を書きつけている。

Ihre seidnen Ärmel gleiten rückwärts,
彼らの絹の袖は背の方へすべり、

Ihre seidnen Mützen
絹の帽子は

Hocken lustig tief im Nacken.
うなじに深くおかしげにかぶさっている。

Auf des kleinen, kleinen Teiches
小さな小さな池の

Stiller, stiller Wasserfläche
静かな静かな水面には

Zeigt sich alles wunderbarlich im Spiegelbilde.
万物がおもしろく鏡の像となって写っている。

Alles auf dem Kopfe stehend
全てが頭を下にして立っている。

In dem Pavillon aus grünem
緑と

Und aus weißem Porzellan;
白の陶土でできたあずまやの中のものは。

Wie ein Halbmond scheint die Brücke,
まるで半月のように橋は

Umgekehrt der Bogen.
反対に弓なりになって見え、

Freunde, schön gekleidet, trinken, plaudern.
仲間たちは着飾り、酒を飲み、談笑する。

4. VON DER SCHÖNHEIT 美しさについて

Junge Mädchen pflücken Blumen,
乙女たちが花をつんでいる。

Pflücken Lotosblumen an dem Uferrande.
岸辺に咲くはすの花をつんでいる。

Zwischen Büschen und Blättern sitzen sie,
やぶと木の葉の間に彼女らは座り

Sammeln Blüten, sammeln Blüten in den Schoß und rufen
花をつんでは裾の中に入れ、そして

Sich einander Neckereien zu.
互にふざけあっている。

Gold'ne Sonne webt um die Gestalten,
黄金の太陽がその姿のまわりをめぐり、

Spiegelt sie im blanken Wasser wider.
彼女らを輝く水面に写し出している。

Sonne spiegelt ihre schlanken Glieder,
太陽は彼女らのきしやな肢体と

Ihre süßen Augen wider,
愛らしいまなこを写し出す。

Und der Zephir hebt mit Schmeichelnosen
そしてあたたかい風がかわいがるように

Das Gewebe ihrer Ärmel auf,
彼女らの肩の布を持ち上げ、

Führt den Zauber ihrer Wohlgerüche durch die Luft.
乙女の芳香の魅力を大気の中へまいていく。

O sieh, was tummeln sich für schöne Knaben
ほらごらん、なぜ若者はいそぐのか、

Dort an dem Uferrand auf mut'gen Rossen,
あそこの岸辺で勇ましい馬にまたがり、

Weithin glänzend wie die Sonnenstrahlen;
まるで太陽の光のように輝きわたる、

Schon zwischen dem Geäst der grünen Weiden
もうすでに緑の柳の枝の間に

Trabt das jungfrische Volk einher!
一群の若者がこちらへ駆けてきた、

Das Roß des einen wiehert fröhlich auf,
一人の若者の馬が楽しそうにいななき

Und scheut, und saust dahin,
何かに驚いて向うへ駆けていった、

Über Blumen, Gräser wanken hin die Hufe,
花や草の上をひずめがゆれながら駆けていった、

Sie zerstampfen jäh im Sturm die hingesunk'nen Blüten,
そのひずめは急に狂いたってたおれた花を踏みつぶし、

Hei! Wie flattern im Taumel seine Mähnen,
ほら、そのたてがみは酔いしれてたなびき、

Dampfen heiß die Nüstern!
熱い鼻息をふかせている!

Gold'ne Sonne webt um die Gestalten,
黄金の太陽がその姿のまわりをめぐり、

Spiegelt sie im blanken Wasser wider,
彼女らを輝く水面に写し出している、

Und die schönste von den Jungfrau'n sendet
そしてとりわけ美しい乙女が

Lange Blicke ihm der Sehnsucht nach,
若者にあこがれのまなざしをじっと送っている、

Ihre stolze Haltung ist nur Verstellung,
彼女の気位の高いポーズはほんのまやかし、

In dem Funkeln ihrer großen Augen,
彼女の大きなまなこのきらめきの中に、

In dem Dunkel ihres heißen Blicks
彼女の熱いまなざしのかげの中に、

Schwingt klagend noch die Erregung ihres Herzens nach,
彼女の心の高揚がなお訴えるように揺れ動いている、

5. DER TRUNKENE IM FRÜHLING 春に酔えるもの

Wenn nur ein Traum das Leben ist,
もし人生がただの夢ならば、

Warum denn Müh' und Plag'!?
どうして苦勞を重ねたりするものか、

Ich trinke, bis ich nicht mehr kann,
私はもう飲めなくなるまで酒を飲むだろう、

Den ganzen lieben Tag!
このすばらしい一日中!

Und wenn ich nicht mehr trinken kann,
そしてもし私がもうそれ以上飲めなくなったら、

Weil Kehl' und Seele voll,
つまりのどや心がいっぱいになってしまったら

So tauml' ich bis zu meiner Tür
そしたら私は自分の部屋までよろよろ歩き、

Und schlafe wundervoll!
すばらしい眠りにつくだろう、

Was hör' ich beim Erwachen? Horch!
目覚める時は何が聞こえるだろう? ほら聞いて

Ein Vogel singt im Baum.
鳥が木にとまって歌っている、

Ich frag' ihn, ob schon Frühling sei,
私は鳥に尋く、もう春になったのかい?

Mir ist, mir ist als wie im Traum.
私は、私はまだまるで夢の中、

Der Vogel zwitschert: Ja! Ja!
鳥はさえずって答える: そうよ、そう

Der Lenz, der Lenz ist da, sei kommen über Nacht!
春は、春はもうそこに、夜の間にやってきたわ、

Aus tiefstem Schauen lauscht' ich auf,
私がじっと耳をすまして聴くと、

Der Vogel singt und lacht! und lacht!
鳥は歌い笑った、笑った、

Ich fülle mir den Becher neu
私は杯を再び満し

Und leer' ihn bis zum Grund
そしてそれをすっかり空にした、

Und singe, bis der Mond erglänzt
そして歌う、月が輝きだすまで、

Am schwarzen Firmament!
あのまっ暗な天空に!

Und wenn ich nicht mehr singen kann,
そしてもし私がもうそれ以上歌えなくなったら

Und wenn ich nicht mehr singen kann,
そしてもし私がもうそれ以上歌えなくなったら

So schlaf' ich wieder ein.
そしたらもう一度眠りにつく、

Was geht mich denn der Frühling an!?
春は私に何の関係があるというのか、

Laßt mich betrunken sein!
どうぞ酔っぱらったままにしておくれ、

6. DER ABSCHIED

告 別

Die Sonne scheidet hinter dem Gebirge.
太陽は山の彼方へ沈み

In alle Täler steigt der Abend nieder
全ての谷には夕闇かおる。

Mit seinen Schatten, die voll Kühlung sind.
夕べの陰はあたりをすっかり冷してしまった。

O sieh! Wie eine Silberbarke schwebt
おお見よ、まるで銀の小舟のようにゆらゆらと

Der Mond am blauen Himmelssee herauf.
月が青い天の海をのぼってくる。

Ich spüre eines feinen Windes Weh'n
私は心地よい風がふくのを感じる。

Hinter den dunklen Fichten!
松の木の暗がりの下で

Der Bach singt voller Wohllaut durch das Dunkel.
小川は美しい音色で暗闇の中を歌う。

Die Blumen blassen im Dämmerchein.
花は薄明りの中で青白む。

Die Erde atmet voll von Ruh' und Schlaf.
大地の息づかいは静寂と眠りに満ちている。

Alle Sehnsucht will nun träumen,
あこがれがすべて今夢見られようとしている。

Die müden Menschen geh'n heimwärts,
疲れた人々は家路につく。

Um im Schlaf vergess'nes Glück
眠りの中に忘れられた幸福と

Und Jugend neu zu lernen!
青春とを新たに得るために。

Die Vögel hocken still in ihren Zweigen.
鳥たちは静かに枝にとまっている。

Die Welt schläft ein!
この世は眠ってしまった!

Es wehet Kühl im Schatten meiner Fichten.
冷たい風が私のいる松の木陰にふく

Ich stehe hier und harre meines Freundes.
私はここに立ち、長く友を待っている。

Ich harre sein zum letzten Lebewohl.
私は待つ、彼に最後の別れを告げるために。

Ich sehne mich, O Freund, an deiner Seite
私は憧れる、おお友よ、君の側にいて

Die Schönheit dieses Abends zu genießen.
この夕べの美しさを味わいたい。

Wo bleibst du? Du läßt mich lang allein!
どこに君はいるのか。君は私を長い間一人にしているのだ!

Ich wandre auf und nieder mit meiner Laute
私は琴をかかえてあちこち歩きまわる

Auf Wegen, die von weichem Grase schwellen.
やわらかい草におおわれた道の上を。

O Schönheit, o ewigen Liebens,
おお美よ、おお永遠の愛と

Lebens trunkne Welt!
生命に陶醉した世界よ!

Er stieg vom Pferd und reichte ihm den Trunk
馬から降り、そして彼に

Des Abschieds dar.
別れの杯を差出し出した。

Er fragte ihn, wohin er führe
彼にたずねた、いったいどこへ行くのか。

Und auch warum, warum es müßte sein.
そしていったいどうして行ってしまうねばならぬのかと。

Er sprach, seine Stimme war umflort:
彼は言った。その声はくもっているようだった。

Du, mein Freund,
私の友よ

Mir war auf dieser Welt das Glück nicht hold!
私はこの世では運に恵まれなかった。

Wohin ich geh'? Ich geh', ich wandre in die Berge.
私はどこへ行くかって? 私は、私は山々を歩きまわる。

Ich suche Ruhe, Ruhe für mein einsam Herz!
私の求めるのは安らぎ、私の孤独な魂の安らぎなのだ。

Ich wandre nach der Heimat, meiner Stätte!
私は故郷へ向う。私の場所へ。

Ich werde niemals in die Ferne schweifen.
私はもう決して彼方へさまよい行きはしない。

Still ist mein Herz und harret seiner Stunde!
私の心はおだやかに、自分の時がくるのを待ちこがれている。

Die liebe Erde all überall
愛しき大地はいたるところ

Blüht auf im Lenz und grünt aufs neu!
春には花が咲き、新緑がよみがえる。

Allüberall und ewig, ewig blauen licht die Fernen,
いたるところ永遠に、青く彼方は輝く。

Ewig, ewig, ewig, ewig, ewig, ewig, ewig!
永遠に、永遠に、永遠に、……

(訳: 門倉百合子)



Gustav Mahler